

## 観世大夫元雅小考

——大夫号の意義の変遷——

おもて あきら

世阿弥の息男観世十郎元雅は、確かに観世大夫に補任されていた。『申楽談儀』に、

一、永享元年（四二九）三月、薪の神事。五日、一乗院にて、……観世大夫元雅、八幡放生会の能をす。……（第27段）

とあるのが証拠である。一方世阿弥は応永29年（四三二）四月には既に出家入道していた。

その二つの事を結び合わせ、世阿弥は（応永29年頃）出家入道して、観世大夫の職は長子十郎元雅に譲っていたものであろう（『能楽源流考七一頁』）と解するのが、従来の説である。

だが、江戸期に編まれた観世家系譜類は、元雅を観世大夫の歴代に加えず、観阿弥・世阿弥に続く三代目を音阿弥（三郎元重）にしている。天文初年（一五三二）観世国広筆『四座之役者』が既にそうであるから、それが室町期以来の観世座の伝統的立場であったと思われる。勿論元雅を第三代と見なすのが当然であるとするのが学界の説で、私も以前は観

世大夫十五世（但し元雅を加えれば十六世）の元章なごなどと、世代数のズレを注記で示すことが多かった。

だが近年は意識的にそれをしていない。元雅を歴代に加えない観世座の伝承には十分理由があると考えようになつたためである。

一体、大和猿楽の大夫号は、辨猿楽・八講猿楽等に参勤した技芸優秀な役者に、興福寺や多武峰寺の衆徒が補任の形で与えた称号であつて、座の棟梁に専用のものではない。三役も大夫に補任されたし、一座に同時に何人も大夫がいたりした。親子が共に大夫である場合も多く、二人の金春大夫を金春大夫がらふ（金春八郎安照）と金春若大夫（金春七郎氏勝）と区別して記録したような例もある。

だが、一座の棟梁はほとんど大夫に補任された事を背景にしてか、棟梁の為手を座名に大夫号を添えた形で呼ぶ風習が世阿弥時代には既に生れていた。『常楽記』が至徳元年（三八）の観阿弥の死を「観世大夫」の名で伝え、春日神主師盛の『至徳二年記』が金春権守ら

しき人物を「金春大夫」と記録しているのが古い用例で、世阿弥が著書の中で婿の氏信を金春大夫と呼んでいるのもそれである。その氏信(禪竹)が「金春式部大夫氏信」とか「金春竹田奏式部大夫禪竹翁」とか、特定の職名を添えた大夫号を肩書にした署名は残しているが「金春大夫」と称した例が無い事は、世阿弥が「左衛門大夫奏元清」と署名してはいるが「観世大夫」と称した例が無いのとあいまって、座名プラス「大夫」の形が略式の通称にしか過ぎなかったことを示しているよう。

然るに、観世座が音阿弥の頃になって室町幕府の御用猿樂的地位を独占的に獲得し、観世座の棟梁が幕府内で特定の地位を占めるようになって以来、通称に過ぎなかった「観世大夫」の名が職名的要素をも兼ね備えるに至った。六世の元広以降の観世大夫が「観世大夫元広」とか「観世大夫元忠」とか自署しているのは、それが幕府に於ける特定の職能・地位を示す誇り得る肩書だったからであろう。同じ頃の金春座の棟梁は、「竹田金春泰元安」「竹田金春七郎泰氏昭」などと自署するのが常で、大夫号を用いていない。管見では、禪竹から六代目の安照が「天正十二年甲申五月日金春大夫泰安照」と謄本に署名しているのが、自署の肩書に金春大夫号を用いた最も早い例

である。永祿12年(一五六九)の將軍義昭二条城移徙祝賀能や、翌元龜元年の織田信長邸での能に、観世座と並んで金春座が出動した類の前代の実績が、相統後三年目の安照に観世大夫同様の肩書を用いさせたのであろうか。

豊臣秀吉が金春座を筆頭に四座を揃って召抱え、徳川幕府が秀吉の方針を踏襲して四座をいわゆる式楽に採用した結果、大夫号は四座一流の棟梁専用の職名的なものとなり、興福寺衆徒による大夫補任の慣習も、棟梁級では慶安五年(一六五二)の観世十郎兵衛重清、三役では寛文十年(一六七〇)の宝生座狂言方大倉次郎太郎あたりを最後に、廃絶してしまった。以来、幕府による家督相統認可がそのまま大夫号継承と一体化してしまっただのである。

話を観世十郎元雅に戻すと、彼は確かに興福寺衆徒によって大夫に補任されていたと考えられるし、世阿弥は出家後に元雅に棟梁の地位を譲つたものと思われる。しかし元雅はまだ若年で(応永29年には22歳前後か)、世阿弥の後見を必要としていた。『隆源僧正日記』の応永31年4月18日の、醍醐寺清瀧宮祭礼の楽頭職変更を示す記事に、

…仍大和猿樂観世三郎為「新楽頭」。子供三人不レ劣レ親上手也云々。親観世入道世阿弥、猶相隨而教訓也云々

とあるのがそれを語っている。新しく楽頭に  
なった「観世三郎」とは先学の説かれる如く  
実は世阿弥のことであるが、同じ事実を記録  
した『満濟准后日記』には「観世大夫」とあ  
るから、世間では出家後も世阿弥を観世座の  
棟梁と見ていた事も知られる。同書が応永34  
年・正長元年・永享元年の清瀧宮祭礼猿楽へ  
の出演を記録する「観世大夫」も、やはり楽  
頭の世阿弥であつたらう。永享以後には、世  
阿弥の高齢化に伴ない、元雅が棟梁として活  
動したのであるが、その頃は既に「観世大夫  
両座」(同書、永享元年五月三日)の表現が示す  
如く、観世座は十郎元雅の座と三郎元重の座  
に分裂していた。そして將軍足利義満の後援  
下に花々しく活動したのは元重の率いる観世  
座であり、元雅の座は宝生座と同程度にしか  
幕府に用いられず、永享四年の元雅早世によ  
って破滅するに至るのである。

さて、前述した観世家系譜類は、幕府御用猿  
楽座の棟梁たる観世大夫主体の系譜である。  
そうした立場の系図が、実質的な棟梁として  
さほど活動せず、將軍から後援されもせず、  
同代の元重の蔭に隠れたまま早世した元雅を  
歴代に数えていないのは、むしろ当然の措置  
であり、不当視する必要もない事であろう。  
それに加えて、元重の通称「三郎」(観阿弥も

世阿弥も三郎)が妥当性を暗示する、元重が世  
阿弥の養子で、元雅よりは年長であつたらう  
との見解(香西精氏著『続世阿弥新考』所収「元  
雅行年考」参照)がある。元重の座が本来の観  
世座であつた可能性も無いではない。観世大  
夫の世代数について、近年の私が観世座の伝  
承に従っている所以である。(53・1・3)

表紙の写真 越前勝山滝波白山神社の翁面

勝山は福井市から東へ二十キロ位入つた山  
間であり永平寺に近い。

二月十日は白山神社の祭りで、当屋には厨  
子の中にうめんさま(おめんさま)といつて  
父尉・翁・黒尉の三面が祀られ、村の人達が朝  
から次々とお詣りにくる。午後三時頃になる  
と四五十人の人達で家の中は一ぱいになる。

耕地が豊富らしく、昨年度は他処から若者  
が五名この地区へ移ってきたといふことであ  
つた。この人達の入村式がうめんさまの前で  
行われるのである。神酒をいただき高砂の一  
筋でしめくくるといふ簡単なものであるが、  
能面が信仰の対象として村の生活に寄着して  
いることに襟を正す思いであつた。

この翁面はたいへん豊かな笑いをたたえて  
いる点と、明るい紅の彩色の美しさが抜群で  
ある。室町期の作といわれている。

(写真・文 吉越立雄)